

# 糸賀一雄らの福祉思想の 今日的な実践とその意義について ——浮浪児・戦災孤児と児童虐待問題を考察して

山田宗寛

## 〔抄録〕

糸賀一雄と田村一二、池田太郎は、戦後間もない頃に戦災孤児や浮浪児たちを、福祉や教育によってその人格や発達を輝かせ、社会を築いていく主体となっていくことを願って近江学園を設立した。そこでは子どもや障害のある人の要求を出発点にした実践によって「この子らを世の光に」や発達保障など社会のあり方を提起し、施設や制度を立ち上げ、今日の福祉につながっている。

一方、戦後70年となった現代にあっても、貧困や虐待、ひきこもりをはじめ福祉の課題は広がっている。糸賀らは、福祉対象者への支援課題から、制度や施策を創造し、主体的に社会のあり方を提起した。今日の児童虐待と戦災孤児の問題を考究すると、糸賀らが見つめた社会と現代は、共通する人間の人格や発達の課題が見えてくる。

糸賀思想は、現代の社会においても、今日的に実践していくことが重要であり、すべての人がゆたかに生きる社会を実現していく社会指標といえる。

キーワード：糸賀一雄 戦災孤児 近江学園 児童虐待 発達保障

## 1. はじめに 問題意識

2015年は「戦後70年」で、戦争は人々の幸せや権利を奪うものであり、社会福祉は平和な社会でしか発展しないと、その歴史を見つめ直した年であった。社会福祉は終戦直後の何もない中で施設や制度が立ち上がり、今日まで発展してきたが、現場から今の社会を見つめると、貧困や虐待をはじめ、制度が対応できていない課題が広がっている。

糸賀一雄<sup>1)</sup>は生誕100年（2014年）が経ち、池田太郎<sup>2)</sup>、田村一二<sup>3)</sup>と1946年に設立した近江学園は70年（2016年）を迎える。学園の実践から生まれた落穂寮<sup>4)</sup>信楽学園<sup>5)</sup>あざみ寮<sup>6)</sup>は60年、一麦寮<sup>7)</sup>びわこ学園<sup>8)</sup>も開設50年が経った。滋賀の福祉は歴史の長さだけでなく、県下の各社会福祉法人や支援団体、行政の理念として大切に受け継がれ、先駆的な取り組みは全国に発信され、制度化されてきた。滋賀の施設に勤めると「この子らを世の光に」や発達保障の考えは、現場での利用者との関わりを通じて学ぶことができる。筆者も県下の先輩職員から糸賀思想を学び、近江学園に始まる造形活動の実践理念は「土と色展」<sup>9)</sup>など施設合同展で直接、指導を受けた。このように糸賀思想は実践を通して、人から人へ、世代から世代へと受け

継がれている。

糸賀らは戦災孤児や障害のある子どもたちの問題から「教育の立場でがっちりうけとめてみて、そのことを通して新しい社会や教育の像を未来につくりあげたい」<sup>10)</sup>と当事者一人ひとりの課題に向き合う実践から、福祉を創造し社会のあり方を提起してきた。本稿では、浮浪児や戦災孤児が置かれていた状況と今日の児童虐待問題を文献等から考究し、糸賀一雄の福祉思想（以下、糸賀思想と表記する）の今日的実践の意義について論究する。また、このことは社会福祉専門職養成においても重要な教育課題であることについても述べたい。

## 2. 糸賀一雄が見た終戦直後の社会と浮浪児・戦災孤児

糸賀一雄らは、どのように終戦後の社会を見つめ、近江学園を設立したのであろうか。終戦翌年の様子を「繁華街や街頭などに、あまりに見苦しい子どもたちの姿が群がるようになると、警察の手で『浮浪児狩り』が行われた。トラックに狩り集められて、一時保護所につれて行かれるのである。新聞もラジオも『浮浪児狩り』という言葉をつかった。そしてそこにはそのことに対する何の反省もないように見えた。まさに教育不在だったのである。」<sup>11)</sup>と社会への憤りを訴えている。その社会に対して「われわれは現に浮浪している子供たちを救おう。生活困窮の中に沈没している子どもたちを救おう。そして彼等の中に、今はかくされている個性の輝きを、何とかして引き出すことはできないものだろうか。彼等の中に当然混在している低い知能の者には、その低さに応じた社会的救済の方法を考えよう。精神薄弱のゆえに捨てられている子たちこそわれわれは、さがし出してでも引き受けようではないか。環境と素質のからみ合った現実をそのまま素直に受け入れて、この現実の中に生活と教育の相即する愛の殿堂を建設する」<sup>12)</sup>と近江学園を構想した。

一方で戦災孤児に関する研究は少なく、経験を語る人もほとんどいない。ようやく戦後70年となり、つらかった体験を語り始めたばかりである。浮浪児・戦争孤児の歴史研究を行った逸見勝亮は「第二次世界大戦の空襲によって、あるいは敗戦後に外地からの引き上げ途中に親を喪って、少なくない子どもが孤児となり、引き取り手のないまま街頭に暮らすこととなった。1948年厚生省調査では、このような浮浪児・戦災孤児は12万3,500人にのぼった。ひとびとは浮浪児・戦争孤児を犯罪者の温床もしくは犯罪者とみなした。その一方で、戦争犠牲者として憐憫の対象ともみなしたのである。（中略）浮浪児・戦争孤児は、戦争未亡人・復員兵とともに、疲弊し混乱していた敗戦後の日本社会する社会現象であった」<sup>13)</sup>と述べている。また戦後、著名な思想家としても知られる鈴木大拙（1870年～1966年）にあっても「戦争の悲惨な結果として現れ出た事象の一つに孤児がある。そしてそれが浮浪児となる。浮浪という意味は反社会的ということである。即ち集団生活の中に入ることが出来なくて自分勝手の生活をする。（中略）浮浪児の場合ではそれが積極的に有害となるのだから、そこで浮浪児問題は等閑視出来なくなる。（中略）彼等が一人前の人間になると、その浮浪性としての有害性は容易な

らぬまでに進行する、そしてその結果は一般の集団生活組織の上に看過し難い危険を加えることになる」<sup>14)</sup>と述べている。さらに「浮浪児の反社会性－これが戦争の生んだ日本における矛盾の一面である」と人間の矛盾や本性を見つめているが、当事者が置かれた状況を看破しているとはいえない当事の状況を伺わせる。このことはノンフィクション作家の久田恵の指摘が核心的で「社会は戦争の犠牲者である子どもたちに暖かくなかった。経済復興がなによりも優先された。むしろ、戦後の日本社会は戦争の悲惨さを一日も早く忘れ、希望に満ちた豊かさに向かって旅立つために犠牲者などは切り捨てて、見えなくしてしまいたい、そんな状況に違いない」<sup>15)</sup>というのが子どもたちに社会がとった態度であった。

しかし、糸賀たちは、すでに「子どもたちの現在の非社会的なまたは反社会的な現象の根底に、こうした（浮浪への執着性をたかめさせている）知能や性格の深い考察が行き届くのであれば、とうてい、問題児対策ということはできない。一時的なその場限りの緊急援護でなく、教育と生活を相即させる施設でなければ、結局は井戸替えのごときものに終わってしまう」<sup>16)</sup>と、子どもの発達や教育の課題として深く捉えようとしていたといえる。つまり、「この子らを世の光に」や発達保障などの糸賀思想は戦争孤児の問題に向かい合うことが源泉となって芽吹いたといえる。

### 3. 社会に傷つけられた戦災孤児たちの心

社会の戦争孤児たちへの対応が、どれだけ子どもたちの心像に影響を与えていたのだろうか。その実態は、親を亡くした子どもたちから大人から受けていた扱いは、今日でいう虐待であった。「すみだ郷土文化資料館」で企画された『描かれた戦争孤児』展（2013年）を紹介したラジオ番組である NHK ニュースジャーナルの特集で、戦災孤児の当事者が親戚に預けられて子どもでは耐えられないような重労働や虐待を受けた経験を語った。『NNN ドキュメント'15 シリーズ戦後70年「戦争孤児たちの遺言～地獄を生きた70年（2015年）」』<sup>17)</sup>でも「召使、奴隷、野良犬だ」と罵られ、「死ぬほどつらい」体験を当事者が自ら伝えた。親を亡くし親戚に預けられた孤児たちが、もっとも信頼できるはずの身近な大人たちから虐待を受け続けていたのである。

近江学園の子どもたちは、どうであったのだろうか。職員であった中村健二は、1981年に「朝日社会福祉賞」を受賞したことをきっかけに、かつての園生に再会した。そのことを綴った『戦争って何さ－戦災孤児の戸籍簿－』<sup>18)</sup>には、大人になった孤児たちが自分の人生について語っている。卒園生には、結婚し家庭を築いていたり、中には事業に成功し幸せになった人もあったが、一方で刑に服したり、生きることがつらく自殺に至った人もある。社会からの差別感や孤独感が「先生、ぼくのようなこの馬の骨かわからないもの（戦争孤児）が勉強したといってこれ以上、上級学校へあがっても、会社で人並みの就職ができるのですか?」「私たち（孤児）って、なぜ情にもろいのでしょうか。（中略）一人で生きてきて、そして、これか

らも一人だ。人間一人だといつも自分には言い聞かせているの。それでいいながら、心のどこかに隙があるのね。他人の情を求めているのよ。何回、わが子を産みたいと言ったから知れないよ」などと綴られている。つまり、社会のなかで自分が生きる価値を問い続けたいといけなほど自尊心を失わせたのである。

戦後間もない頃から戦災孤児たちの支援にあたってきた児童福祉施設である双葉園園長であった高島巖は「戦争孤児は決して、特異児ではありません。彼らにもし特異性があるとすれば、それは特異性ありと見る世間の心が、子供たちに劣等意識をもたせ、そうした姿に追い込むのです」<sup>19)</sup>と語っている。戦争に加えて、戦後社会が子どもたちにとっての態度がどれだけ深く心を傷つけたのか、そのことに自ら気づいて実践したのが糸賀たちで、近江学園であったといえる。

#### 4. どれだけ社会は発展したのか ―戦災孤児と児童虐待問題を比較して―

戦災孤児たちは親以外の大人から虐待を受けていたが、現代は親から受ける児童虐待が「全国の児童相談所が昨年度対応した虐待で8万8931件となっており、24年連続で過去最高」<sup>20)</sup>が実態である。日本は世界に冠たる経済発展と高い生活水準、長寿社会を実現した国であるが児童虐待は深刻さを増す一途である。これで「社会はゆたかになった」といえるだろうか。

児童養護施設や障害児施設も被虐待児や家庭での養育が困難な子供たちが増え続けている。コンビニエンスストアが51.5万カ所<sup>21)</sup>と小学校数の2.2万校<sup>22)</sup>の何倍もあり、身近なところで食料が買える環境となった今でも「一日一食しか食べられなかった」と「飢え」にさらされる子どもがいる。一方、戦災孤児たちは、もともと家族と暖かく暮らしていたが、父親が徴兵され、空襲によって家族を喪い、家を焼き出された。焦土でひとりぼっちで路頭に迷い、生きるために盗みなどの罪を犯し、飢えや暴力などの恐怖から耐えなければならなかったのである。

戦後と現代、どちらが子どもたちにとって厳しい状況なのだろうか。戦後すぐに戦災孤児の救護にあたった児童養護施設である「愛児の家」の石綿裕子は「今の愛児の家にいる子は大部分が家庭内暴力の犠牲者です。生まれた瞬間から存在を拒否されて、どうしようもなくなってここに連れてこられる。そういう子は人間としての根っこ部分が弱いのです。愛情がどんなものかわからずに生きてきたから、自分を支えるものがない。(昔の浮浪児はそうじゃなかった)戦争孤児は空襲で両親が死ぬまでは普通の家庭で育っています。親に愛され、兄弟と仲良くし、近所の子どもたちと遊んで暮らしていた。だから人間としての根っこがしっかりしている。施設に住まわして環境さえ整えてあげればがんばって生きていける。だからあの子たちは社長になれたり、子供に愛情を注いで育てて上げたりできるのです。現在の虐待の被害を受けた子供たちだとなかなかそうはいきません」<sup>23)</sup>と語る。経済や国民の生活水準は高まったが人格発達である「人間としての根っこ」はゆたかになったといえない。

## 5. 「この子らを世の光に」を社会指標に

社会の発展と社会福祉は連動をしており、子どもや人間の発達と重要な関わりがあるといえる。これらを社会のなかで保障していくシステムとして、糸賀は社会福祉について「この世の中には、全体としてどんなに繁栄があっても、そのなかで不幸に泣くひとがひとりでもいれば、それは厳密な意味で福祉が欠けた社会といわなければならないと思う。社会福祉ということばの意味は、社会全体の組織のなかで、一人ひとりの福祉が保障される仕組みをいうのである。経済的な意味でも社会的な意味でも、不平等や差別感が克服されなければならない。そしてひとりももれなく、人間としてうまれてきた生きがい豊かに感じられるような世の中をつくらねばならない」<sup>24)</sup>と述べている。その指標として、次の有名な言葉で「この子らはどんな重い障害をもっている、だれと取り替えることもできない個性的な自己実現をしているものである。人間と生まれて、その人なりに人間となっていくのである。その自己実現こそが創造であり、生産である。私たちの願いは、重症な障害をもったこの子たちも立派な生産者であるということ、認め合える社会をつくらうということである。『この子らに世の光を』あててやろうという哀れみの政策を求めているのではなく、この子らが自ら輝く素材そのものであるから、いよいよ磨きをかけて輝かそうというのである。『この子らを世の光に』である。この子らが、生まれながらにして持っている人格発達の権利を徹底的に保障せねばならぬということなのである」<sup>25)</sup>と社会のあり方を提起した。糸賀は子どもたちを「人間としてうまれてきた生きがい豊かに感じる」自己実現の主体として捉え、それを実現させるのが「この子らを世の光に」という社会であることを示したといえる。

## 6. 糸賀思想の今日的な実践のために

「戦後70年」企画として佛教大学でも「平和と福祉～戦争と福祉についてボクらが考えていること」<sup>26)</sup>が開催された。そのプレ企画として、戦後間もない頃の近江学園での実践を当時職員であった岡山喜久治氏から学ぶ機会があった。岡山は、半世紀以上の自らの実践を振り返り「子ども（障害のある人）の要求を大切に、気付いた者が福祉に取り組んできたが、そこではきちんと制度化していくことを大事にした」と語った。この要求を出発点に条件がなくても福祉や教育に取り組み、それを制度として普遍化させてきたことは、糸賀が県庁職員であったことから行政への要望活動に止まらない、実践的なソーシャルアクションであったといえる。このことが滋賀での福祉を創造させてきた推進力であったと考える。

これからの社会において、社会福祉の発展は、かつて真田是が「（政府の福祉切り捨て政策が進められても）社会福祉の領域を縮小することはできずに逆に広がってきたということは、社会福祉が今日の社会に適合的なもので不可欠なものになっているということである」<sup>27)</sup>といったように不可避な課題である。今日の社会においては、貧困や格差、引きこもりやいじめ、自死など様々な社会問題が起こっており、社会福祉の対象が広がっている。また、社会福祉の

現場は、障害の重度化、人材や財政難、建物や職員の非正規化や体制の確保など厳しい環境にある。このような現代の課題に対して、糸賀思想によって「福祉対象者への支援課題から、制度や施策を創造し、主体的に社会のあり方を提起すること」ができると考える。

このことを社会福祉専門職教育において考えると、職員が継続的に実践に取り組み専門性を確保できる環境が厳しくなるなかで、実習教育も、より現場の実態に沿った対応が求められていくといえる。このことは実習教育において福祉現場で起きている問題から社会のあり方を問うていける実践力を培うことである。つまり、当事者の人格や発達と社会のあり方を同時に考え深めていくことは、福祉キャリアの基盤となり、糸賀思想の今日的実践といえる。

## 結語

糸賀思想の原点は、大人が起こした戦争であるのに戦災孤児を見捨て、浮浪児を狩るという社会に対して、その子どもたちを教育や福祉によって輝かせ、社会を創造していく主体にしたことにある。その願いから設立された近江学園では、子どもや障害のある一人ひとりの要求を大切にした実践から施設や制度がつくられていった。つまり、糸賀思想は、人間の人格や発達が根底にあり、それを福祉や教育によって輝かせることといえる。

一方、戦後70年が経っても福祉の対象や領域は広がっており、児童虐待の状況をみても、現代の方がゆたかな社会と必ずしもいえない。糸賀思想は、このような現代社会に通じる社会指標といえ、生きることが輝くような社会をめざして今日的に実践していくことが重要である。

## 注・引用文献

- 1) 1914-1968
- 2) 1909-1995
- 3) 1908-1987
- 4) 1950 開所
- 5) 1952 開所 当初は信楽寮
- 6) あざみ寮（1953 開所）もみじ寮（1969 開所）  
現「あざみ・もみじ」（社会福祉法人大木会）2012 改名
- 7) 1961 開所 現「一麦」（社会福祉法人大木会）2012 改名
- 8) 現「びわこ学園福祉医療センター草津」（1963 開所，旧第一びわこ学園）  
現「びわこ学園福祉医療センター野洲」（1965 開所，旧第二びわこ学園）
- 9) 「土と色展」（1980-1999）10 回開催 京都市美術館  
京都新聞社と滋賀と京都の福祉団体が主催。今日では ARTBRUT 作品として滋賀県の造形作品は国際的にも注目されている。

- 10) 糸賀一雄（不明）「糸賀一雄著作集Ⅰ」日本放送出版協会 42
- 11) 糸賀一雄（不明）「糸賀一雄著作集Ⅰ」日本放送出版協会 42
- 12) 糸賀一雄（不明）「福祉の道行－生命の輝く子どもたち」中川書店 19-20
- 13) 糸賀一雄（不明）「糸賀一雄著作集Ⅰ」日本放送出版協会 13
- 14) 鈴木大拙（1949）「浮浪児問題と人口問題とに因みて」『ニューエイジ』（7），6-81
- 15) 久田恵（1999）「コメント 浮浪児が投げつけた小石」『婦人公論』84(2) 中央公論新社 65
- 16) 糸賀一雄（不明）「福祉の道行－生命の輝く子どもたち」中川書店 19-20
- 17) 「NNN ドキュメント'15 シリーズ戦後70年『戦争孤児たちの遺言～地獄を生きた70年（2015）』」  
2015.3.23, 日本テレビ
- 18) 中村健二（1982）「戦争って何さ－戦争孤児の戸籍簿」ドメス出版 1982.8.15
- 19) 青地晨（1951）「浮浪児－ルポルタージュ・戦争犠牲者の実体」『婦人公論』37(12)』
- 20) 厚生労働省（2015.10）子ども虐待による死亡事例等の検証結果（第11次報告の概要）及び児童相談所  
での児童虐待相談対応件数等
- 21) 48,764カ所 JFA コンビニエンス統計調査月報 1993.8 調べ（HP）jfa-fc.or.jp
- 22) 22,693校（2007.5.1）文部科学省調
- 23) 石井光太（2013）「浮浪児 1945－彼らはどこへ消えたか 浮浪児たちの今（2）」『新潮 45 月刊版』新潮  
社
- 24) 糸賀一雄（1968）「糸賀一雄著作集Ⅲ」日本放送出版協会 357
- 25) 糸賀一雄（1968）「福祉の思想」日本放送出版協会 177
- 26) 佛教大学福祉教育開発センターシンポジウム・社会福祉学部人権問題研修会『平和と福祉～戦争と福祉  
についてボクらが考えていること』2015.10.24
- 27) 真田是（2003）『社会福祉の今日と明日』かもがわ出版 45

（やまだ むねひろ 非常勤講師）

